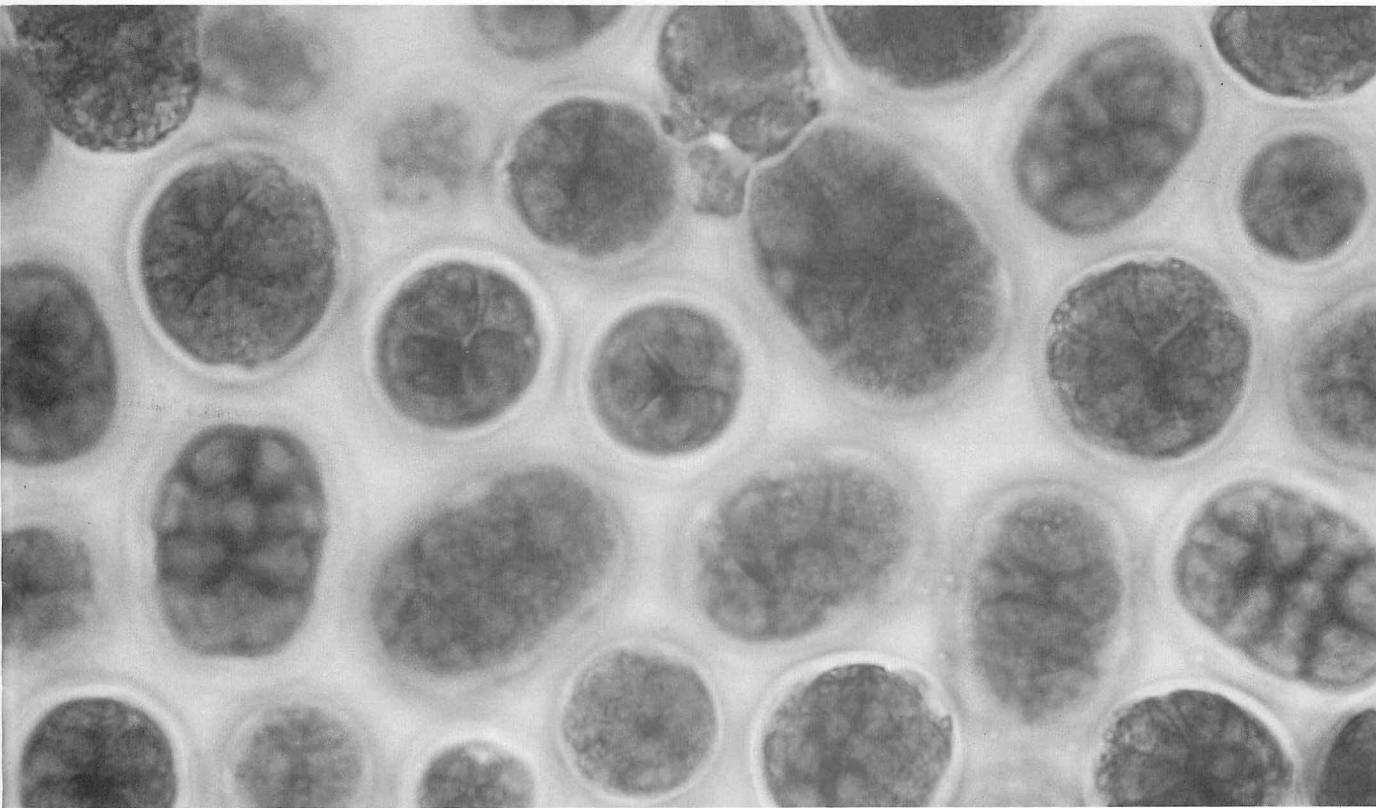


石川県白山自然保護センター編集

はくさん

第17巻 第1号



カタマリヒゲマワリ

手取川ダムに蓄えられた水は農工業用水、飲料用水として日々使われています。昭和54年に貯水が開始されてから毎月1回の水質調査が県（衛生公害研究所と白山自然保護センター）を中心として実施されています。

今回紹介するカタマリヒゲマワリはパンドリナ・モラムという学名を持った植物プランクトンです。一つの細胞の大きさは直径6-12ミクロンで2本の鞭毛をもち、泳ぐことのできる緑藻の仲間です。ふつう16あるいは32個の細胞が密着してひとつの群体となります。昭和60年9月にはダム湖の湾入部で一時的に増え、湖面が緑色になったことがあります。

白山の ショウジョウバエ

佐伯芳造



はじめに

ショウジョウバエは、春から夏に暖かい日が数日続くと台所の隅やゴミ箱付近を飛ぶ体長 1.5mm～ 4.0mm位の小さいハエです。体は黄色が多く黒いものもあります。眼の赤いことと酒造り（発酵）の所に多いことが、“猩々”（能）にちなんで名付けられたようです。高等学校では遺伝の教材として登場し遺伝学発展に重要な役割を果たしたことを学びます。そして、今でも世界中の多くの研究室で飼育され、研究や実習に使われています。

自然の生態系の中では分解者に位置づけられ、上記のように発酵した有機物の多いところによくみられます。そして、森林内の樹液やキノコ等が集まる野生種と、人の生活にもなってでるゴミなどに深く関わりを持つ人家性種に大別されて、日本ではこれまでに200種程が確認され、森林・草地・田畑・果樹園・人家周辺・池沼河川の水辺などの様々な環境に適応して生息していることがわかっています。

知られていない 日本海側ブナ林の ショウジョウバエ

けれどもショウジョウバエ類の研究は、本州では限られた地域でしかまだおこなわれておらず、石川県でもこれらの調査は少なく、特に石川県の代表的な森林植生である“日本海型ブナ林”に生息するショウジョウバエ類の研究はおこなわれていませんでした。そこで、県内でも自然環境がよく保全されてきた白山チブリ尾根のブナ林と針葉樹林を中心に、南竜ヶ馬場や市ノ瀬

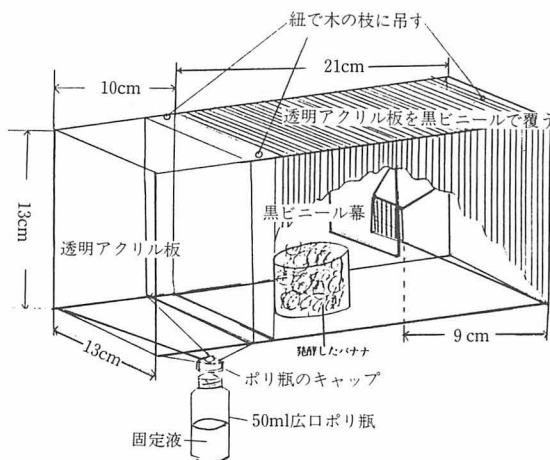
でも昭和63年の夏～秋に調査してきました。

調査場所は別山登山道わきの4カ所（A・B・D及びE）と南竜ヶ馬場（C）で、ショウジョウバエの採集には2種類のトラップと捕虫網を用いておこないました。

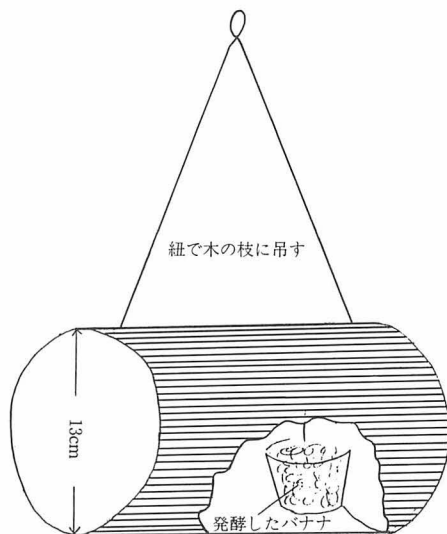
発酵バナナで つかまえる

ショウジョウバエをおびき寄せる餌には、発酵バナナを用いました。これは、皮をつけたまま輪切りにしたバナナに乾燥酵母を振りかけて発酵させたもので、このにおいにおびき寄せられて多くのショウジョウバエが集まってきます。変型戸田式トラップは、餌の置いてある入口に近い部屋とハエを捕獲する瓶を

取り付けた奥の部屋に分かれています。入口の部屋は光が入らないように暗くしてあるので、餌の臭いによってトラップの中に入ってきたハエは、明るい方へ集まる性質（走光性）のために、明るい奥の部屋に移動し、やがて下に落ちてビンに入ります。このトラップは昭和63年8月から10月までの間、地上から1～1.5mの高さの木の枝に吊るし、吊るしてから1週間後に捕獲されているハエを回収しました。このトラップを吊るした地点は2カ所あり、A地点は標高約1900mのチブリ避難小屋付近で、まわりにはオオシラビソの林があり林床はササで覆われていました。もうひとつのB地点は標高約1300mの水飲み場付近のブナ林で、典型的な森林の階層構造がよくわかる場所でした。



変型戸田式トラップ



ミルク缶トラップ

ミルク缶トラップ(図・写真、径13cm)はミルク缶の蓋を開けて、入口を横にして吊し、中には変形戸田式と同じように発酵バナナを誘引物としていれておきました。放置しておき3時間おきに缶をビニール袋で覆って、缶の中に入っているハエを調査しました。昭和63年8月9日午前11時から翌日の10日午前11時までの間このトラップを設置したC地点は、南竜ヶ馬場トンビ岩コース登山口付近で、まわりにオオシラビソの林がひろがるお花畑がきれいなところでした。

このほかに捕虫網による採集も行いました。定量的な採集ではありませんが、別山登山道全域で行いました。捕虫網のみによる採集は柳谷川右岸にひろがるサワグルミ林(D地点)と市ノ瀬(E地点)です。

表 白山で採取されたショウジョウバエ

植 生	地点名	D地点	B地点	A地点	C地点
	標 高	標高1100	標高1300 下段床 ブナ林	標高1900 チブリ避難小屋 オオシラビソ林	標高2050 南龍が馬場 オオシラビソ林
メマトイ属	オオメマトイ		+	0	0
	フタオメマトイ		+	0	0
	オナガメマトイ		+	0	0
	ムチメマトイ		+	0	0
	ツバメメマトイ		+++	0	0
	ノコギリメマトイ		+	0	0
	ツルクビメマトイ		+	0	0
	コブマダラメマトイ		++	0	0
	カッパメマトイ		++	0	0
	オオマダラメマトイ		+	0	0
ショウジョウバエ属	クロツヤショウジョウバエ		0	+	0
	ギンスジショウジョウバエ		0	+	0
	シロショウジョウバエ		+	0	0
	ニセエゾショウジョウバエ		+	++	+
	ヨスジショウジョウバエ		0	0	+
	ヒョウモンショウジョウバエ		0	0	+
	フタスジショウジョウバエ		0	+	+++
	ニセオウトウショウジョウバエ		0	+	++
	オウトウショウジョウバエ		0	+	+
	ヒトクシショウジョウバエ		0	0	+
	エゾホシショウジョウバエ		++	++	0
	オオホシショウジョウバエ		0	0	+
	クモマシショウジョウバエ		+	+	+
	フタオビショウジョウバエ		+	+	0
	エゾショウジョウバエ		+	+++	++
	イガグリショウジョウバエ		0	0	0
	マキオショウジョウバエ		0	+	+++
	オオホシショウジョウバエ		0	+	0

凡例 0:確認されず ++:普通
+:少ない +++:多い



木に吊るされた
ミルク缶トラップ

低地に多い メマトイ属

採集された種をまとめると表のようになり、それらはメマトイ属10種とショウジョウバエ属18種の合計2属28種でした。

チブuri尾根避難小屋付近（A地点）及び南竜ヶ馬場トンビ岩コース登山口付近（C地点）にみられる亜高山性の背の低い針葉樹林内の空き地のような所では、フタスジショウジョウバエ

とマキオショウジョウバエが多く採集されました。これらのハエはかなり標高の高いところまで普通に生息する代表種といえるようです。

ブナ林内（B地点）では、エゾショウジョウバエが多く、そのほかにエゾホシショウジョウバエ・ニセエゾショウジョウバエもかなり多く採集されました。いずれも森林の最下層（林床）に多いハエです。今回はトラップを林床にしか置いていなかったためこれらの種が多かったと考えられますが、もっと上の層にトラップを置けば、フタスジショウジョウバエ・マキオショウジョウバエがもっと採集されると思われます。

メマトイ属のハエはトラップにあまり集まらず、黒光りするようなものに集まるもののがかなりいます。道などを歩いていると眼のまわりや、つやのあるボタンのまわりに寄ってくるハエで、顔のまわりを飛び交い、時には眼に入る不快なハエです。今回は標高の低いD地点付近で多く、B地点より標高の高いところではあまり見られませんでした。また、採集されるのはほとんど雄ばかりで雌は稀というのは、交尾（求愛）行動などに関係があるのかも知れません。

ヒョウモンショウジョウバエは市ノ瀬だけで採集しましたが、他の地点ではまったく採集されませんでした。このハエは典型的な人家性種と言われ、この地区に古くからある1軒の旅館や近年開設されたキャンプ場の炊事舎・トイレ舎等の人為的な環境に依存しているものと思われます。今回の調査では 標高の高い調査地点からはこの種がみられないことから人による俗化は進んでないともいえますが、登山者の多い砂防新道や室堂、標高の高いキャンプ場などではこの種が見られるかも知れません。ゴミなどの持ち帰りをしないところのような人家性種の侵入の恐れがあります。

白山の限られた地域での断片的な調査ですから推測の域をでないのですが、今後登山者の多い室堂、砂防新道地域との比較を行ったり、さらに他の山系との間で比較研究をしたり、また、誘引物を発酵バナナ以外の物を用いて調査するなど、ショウジョウバエの世界には興味のない話題がたくさんあります。
(大聖寺高等学校)

白山登山するアキアカネ

上田 哲行 ■

「夕焼けこやけの赤とんぼ・・・」と童謡にも歌われているように、アカトンボは日本人になじみの深いトンボです。日本には20種ほどのアカトンボが生息していますが、その中で最も普通にみられるのはアキアカネです。秋晴れの朝、2匹連なったトンボが次々と同じ方向に向かって飛んでいるのを見かけたら、それはアキアカネと思って、まず間違いありません。



アキアカネは6月中ごろ羽化する

アキアカネを秋に出現するトンボだと思っている人が多いようです。でも、実際はそれよりずっと前、6月中頃から成虫になっています。羽化するとすぐに平野部から姿を消してしまうため人目につきにくく、またその頃は赤くないので一見別のトンボに見えることからでしょう。

平野部から姿を消したアキアカネはどこへいくのでしょうか。夏に白山に登ったことがある人ならば尾根筋で多数のトンボの姿を見かけられたことがあると思います。実はそれがアキアカネなのです。アキアカネは、夏の間はこのように白山など山岳地帯で過ごしています。その間に体重も2倍ほどに増え、体も赤く色づいていきます。そして秋になると再び平野へ降りて、稲刈り後の水田などで産卵を行うという生活を送っています。

なぜ山へ登るか

アキアカネは日本だけに分布する日本特産種だとされています。ヨーロッパからシベリアを経て朝鮮半島に至る地域に、非常によく似たタイリクアキアカネという種が分布しており、これが日本のアキアカネの祖先ではないかと考えられています。朝比奈正二郎博士は、両種は基本的に同一種である可能性が高いとした上で、両種の間を次のように推察されています。氷河期に日本列島が大陸と陸続きになったときに寒冷地を好むタイリクアキアカネが日本に侵入した。その後温暖化が進み、日本列島が大陸から切り離されたとき列島に隔離され、平地の暑い夏を避けるために高地への移動習性を進化させたのがアキアカネであろうというわけです。

このように、涼しい気候を好むアキアカネにとって日本の平野部の夏が暑すぎるため、涼しくなる秋まで、いわば「避暑旅行」を行うのだという説明が一般的です。

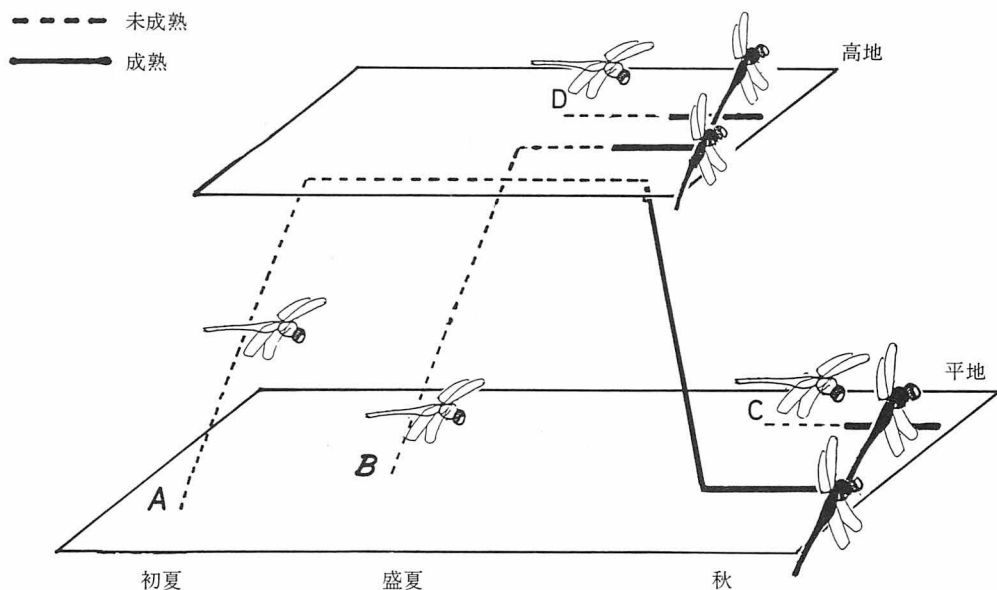
上の説明は成虫にとって日本の夏が暑すぎるということを仮定しています。しかし、単に成虫にとって暑すぎるだけならば、暑くなる前に卵を産むという手もあるのではないのでしょうか。そうすれば、わざわざ山へ登る必要性もなくなります。これは無茶な話ではありません。実際、北海道のアキアカネは羽化から1-2週間で性的に成熟し、繁殖活動を開始しているらしいのです。成虫になってから3カ月前後も繁殖行動を行わず、秋になって初めてそれを行うという生活は、本州以南のアキアカネに特有のものなのです。どうして彼らはそのような生活パターンを選択したのでしょうか。

卵の眠り

変温動物である昆虫にとって、餌もない厳しい冬を乗り切るためにはそれなりの準備が必要です。特別な仕組みが体の中に出来上がっていないと、冬を越すことはできません。アキアカネでは、そのような仕組みは卵の段階に準備されているようです。

アキアカネの卵（正しくは胚）は、産み落とされるとすぐに発生を開始しますが、途中で発生が停止し、自発的に休眠状態に入ります。この眠りは、外部の温度条件にかかわらず必ず引き起こされるものです。つまり遺伝的にプログラムされた眠りです。そしてこの眠りの状態こそが冬を越すための特別な仕組みなのです。ただやっかいなことに、このプログラムされた眠りは2〜3カ月程度しか継続しません。それでは冬の最中に目覚めることにならないのでしょうか。たとえば、金沢周辺では9月中旬から産卵活動が始まりますから、早いものでは冬本番を控えた12月頃に目覚め始めることになってしまいます。でも大丈夫なのです。その頃になれば、今度は本格的な冬の低温が卵の眠りのための子守歌になり、そのまま暖かくなる春まで眠り続けることができるのです。つまり、プログラムされた眠りは卵が無事に冬を向かえるための眠りなのです。奇妙だと思われるかも知れませんが、いったん休眠状態に入ったアキアカネの卵にとって危険なのは、冬の厳しさではなく、冬前の一時的な暖かさによって目覚めてしまうことです。冬前に目覚めてしまえば、後は死があるのみです。





アキアカネにみられる生活史の変異（仮説）

アキアカネには、本文で紹介した長い成虫期間を持つAタイプの生活史を送るもの以外にも、別のタイプの生活史を送るものがあるようです。真夏に羽化する個体（B）や、多くの個体が山から降りて来る秋になって羽化して来る個体（C）、高地で一生涯を送る個体（D）がみられます。これらは、いずれもAとはちがって羽化から繁殖活動を開始するまでの期間は短いようです。

なぜ秋に産卵するか

では、産卵時期がもっと早くなったらどうでしょうか。もし7月頃に卵が産まれていたとしたら、早いものでは9月後半にはプログラムされた眠りは終了していることとなります。卵が引続き眠るためには、約10℃以下に保たれる必要があるようなのですが、この時期の金沢の平均気温は20℃を越えています。このような高温下では卵は目覚めてしまい、幼虫で冬を迎えなければならなくなります。何の備えも持たずに冬を迎えた幼虫は冬の間に死滅してしまうことになるでしょう。そうならないために、プログラムされた眠りで冬を迎えることができるようになる時期まで、金沢周辺であれば9月ごろまで産卵を抑制しなければならないのです。卵の時期と冬をうまく時間的に一致させるために、卵は秋に産まなければならないのです。

アキアカネが夏に山に登るのは避暑のためと考えて間違いのないでしょう。でもそれは卵で冬を越すという生活スタイルを維持する必要から、成虫期間を秋まで引き延ばしたことの結果であるということは、理解しておく必要があります。

能登のアキアカネ

アキアカネが夏を過ごすにはある程度高い山が必要です。これまでの3年間の調査によれば、加賀地方では800メートル以上の高さの場所で夏を過ごしているようです。能登にはそんな高い山はありません。高洲山山頂（標高576m）などごく一部の場所で夏を過ごしているアキアカネを見つけることができました。でもその数は決して多くありません。能登のアキアカネの大部分はどこで夏を過ごしているのでしょうか。栃木県などでは、夏の終わりに翅に印をつけて放し、それがどこで再び捕まるかという調査が行われています。それによると、最高では72キロメートルはなれた場所まで移動していました。再捕獲調査が栃木県内に限られていたことを考慮すれば、実際にはもっと長距離を移動しているとみられるべきでしょう。100キロメートルぐらいは簡単に移動するのではないのでしょうか。

このようにアキアカネは移動能力に優れていますから、白山地域で夏を過ごしたものが能登に飛来している可能性もかなり大きいと思われます。秋晴れの朝にみるアキアカネのつがいの移動方向は一定の方向であるように思われます。能登のいろいろな場所でどこからどこへ移動して行くかが明らかになれば、能登のアキアカネの由来もわかってくるかも知れません。また、かりに白山などで夏を過ごした個体が飛来するとして、それらの個体はどこで産まれたのでしょうか。やはり能登半島でしょうか。興味はつきません。とはいえ、このような調査にはかなりの人手、というよりは人の目が必要ですから、なかなか思うように任せないのが現状です。

秋津の国のアキアカネ

氷河期に日本に入ってきたとされる動植物には、高山植物や高山蝶などとして、いわゆる生きた化石として山岳地帯で細々と生活しているものが多くみられます。実は、アキアカネの一部にも、そのように高山で一を送ると思われるものが見いだされています。しかし、大多数は平地から来て、また平地に戻って行きます。このような生活を可能にしたのが彼らの優れた飛翔力であるとしても、彼らはなぜ山を降りるのでしょうか。私は、日本の平地の広大な水田が彼らを平地に戻らせる最大の原因ではないかと想像しています。水田という広大な繁殖場所、幼虫の生息場所が存在することこそ、彼らが山から再び降りてくる理由だと思われます。少なくとも結果としては、平地と山岳地帯の間の往復移動というダイナミックな生活スタイルを進化させてまで繁殖場所としての水田にこだわったことが、生きた化石に成り果てることなく、今日の繁栄をもたらしたといえます。

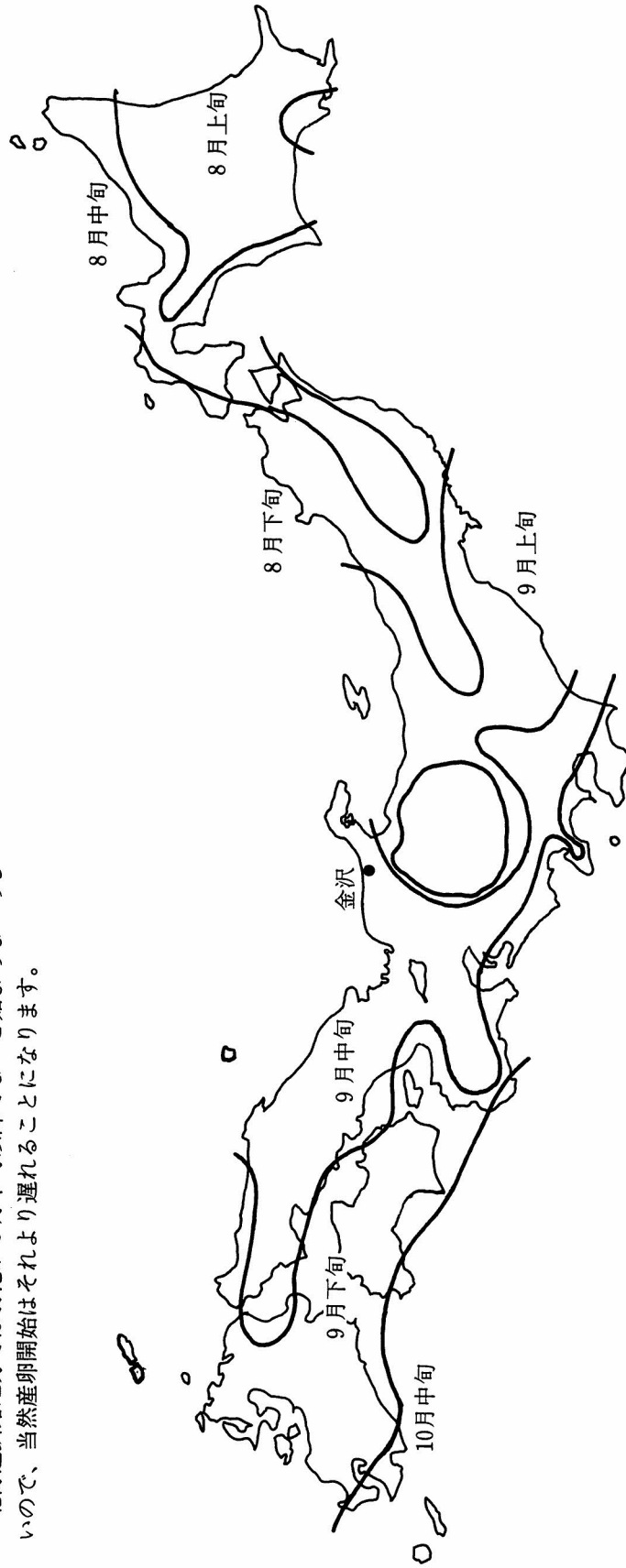
アキアカネの生活ぶりを見ていると、水田を巧みに利用している様子がうかがわれます。アキアカネの歴史は、日本列島における稲作の歴史と深く結びついているのではないかと、研究を進めていく中で強く感じました。そういえば、日本を昔は秋津島と呼んだそうです。秋津とはトンボの古い呼び名ですが、トンボ一般を指すものではなく、アキアカネを指しているものと思われます。稲作とともに日本列島に人々が栄え、アキアカネも栄えてきたのだとしたら、その地を呼ぶのに、これほどふさわしい呼び名はないのではないのでしょうか。

(石川県農業短期大学)

国内各地におけるアキアカネの予想産卵開始時期

卵のプログラムされた眠りを65日、眠りを継続できる温度が 10°C 以下と仮定し、各地の平均気温の年値が 10°C を下回る時期(旬)についての等時曲線から産卵開始時期を予想しました。

北海道釧路地方では羽化が8月中旬以降でないとはじまらないらしいので、当然産卵開始はそれより遅れることとなります。



白山高山帯 の クモ類

高 順 一 郎

▲ハリゲコモリグモ

これまでの研究

白山におけるクモの研究は、私の知るところでは今までに数例しかなく、これらを整理すると、白山では14科78種のクモが確認されています。この数字は、木曾御岳における22科 117種に比べると少ないように思われますが、白山には未だ調査されていない地域が多く、もっと種々の調査方法を駆使する余地があることなどを考慮するならば、増える可能性があると考えられます。昭和63年度から、白山自然保護調査研究会の仕事で白山の高山帯のクモ類について調査をしてきましたので、その中から高山帯のクモの生活について少しお話してみようと思います。

クモを見つけるには

クモは体の表面のキチン質が昆虫ほど発達していないので乾燥に弱く、薄暗くて湿った人目につきにくい場所にいることが多く、クモを見つけるのはそう簡単ではありません。もっとも簡単な方法はアミ（クモの巣）を目印に探すことです。しかし、アミを張るクモはクモのなかでも一部でしかないので、いろいろな種類のクモが見たければ、葉の裏や枝の間、石や木の下側を見たり、地面に積もった落葉を持ち上げて見たりして、こまめに探してみなければなりません。



▲サラグモの巣



◀ ヤマヤチグモの巣



▲ チシマカニグモ

私の見たクモ

コモリグモ類 私が観察したのは、タカネコモリグモ、エゾコモリグモ、ハリゲコモリグモ（写真）の3種です。このうち、タカネコモリグモは、頂上直下（約2650m）の岩の間を歩いているのを見ました。これは白山の最も高いところでの観察といえるでしょう。普通は、ガンコウランやアオノツガザクラなどの植物群落のあるところでよく見られ、高天が原や室堂平に多い種類です。エゾコモリグモは、平瀬道と展望歩道との分岐点付近のガンコウランやアオノツガザクラの植物群集で見られましたが、その他では見られませんでした。ハリゲコモリグモは、別当出合の草むらでよく見られる種類です。

フクログモ類 フクログモ類のなかには、亜高山帯のノブキやオヤマボクチの葉を糸でつづり合わせ、袋を作って中にいるのがよくみられます。これに対して、高山帯では石の下に糸で袋を作って中に隠れているのが観察されます。これらは、どれも全身が薄い黄褐色でアゴだけが黒いので外見上おなじに見えますが、生殖器の形態が異なることから別の種であると思われます。

サラグモ類 亜高山帯では、低木の枝にお椀を伏せたような形のアミがよく見られますが、これはほとんどコシロブチサラグモのアミです（写真）。お椀の底に当たる部分に静止して餌がかかるのを待っているのです。このクモは、夏から秋まで長期間見られ、しかも中飯場の下あたりから南竜分岐点近くまでみることができ、繁殖している種と思われます。また、高山帯では、コサラグモ類が石の下や登山道の土手の部分に不規則に糸を張って小さなアミを作っているのが見られます。

ヤマヤチグモ類 弥陀が原のクロマメノキやコバイケイソウの葉上にアミを張っているのは、ヤマヤチグモ類です（写真）。アミの構造は前方が棚状で後方が管状になっており、普段は棚状の部分にいて餌がかかるのを待っていますが、危険を感じるとアツという間に管の中に逃げ込んでしまいます。ヤマヤチグモ類は、山地帯や亜高山帯でも見られるのですが、これが果して高山帯で観察されるものと同じ種であるかどうかは不明です。

その他のクモ類 別山道のブナ林では、下草の葉上でチシマカニグモが前足を開いて獲物を待つ姿がしばしば見られます（写真）。また、ブナやミズナラの葉の裏にはエゾアシナガグモが卵のうをまもっているのが見られます。

今年の白山登山には、図鑑を手にクモの観察をしてみたいはかがでしょうか。

（石川県農林水産部）

月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
日	サルの出欠	サルの出欠	サルの出欠	サルの出欠	サルの出欠	サルの出欠	サルの出欠
1	A	A	X	C	A	X	A
2							A
3							A
4							A
5	A	X	X	A	X	X	X
6	A	C	X	A	X	X	X
7	X	C	X	A	X	X	A
8	X	A	X	A	A	A	A
9	A	X	X	C	A	X	C
10	X	X	A	C→A	X	A	
11	A	X	X	A	A	X	
12	X	X	X	A	A	X	
13	X	A	X	C→A	A	X	
14	A	X	X	A	X	X	A
15	A	X	X	A	X	X	
16	X	X	X	A	X	X	
17	A	X	X	A	X	X	
18	A	X	X	A	X	A	
19	X	A	C	X	X	X	
20	A	X	C	A	X	X	
21	X	X	C	A	X	X	
22	X	C	C	A	X	X	
23	A	A	C	A	A	X	
24	X	C	C	X	A	X	
25	A	X	C	A	X	X	
26	A	A	C	A	X	X	
27	A	X	C	A	X	A	
28	C	X	C	X	A	A	
29	C→A	X	C	A	X	X	
30	A	X	C	A	X	A	
31	X		C	X		A	

こんな発見

あんな記録 8

野猿広場 出席表 (1983~1988)

野崎英吉

(1988年)

サルは出ていますか

毎年、中宮展示館のガイドコーナーにはいろいろな質問、問い合わせがあります。そのなかで、ジライ谷野猿広場のサルたちについては多く、特に多いのが、「サルは出ていますか」という質問です。雨の日にサルがでていないと、「天気が悪いとこないのね」とひとり納得して帰って行かれる方もいらっしゃいます。「どうして、サルは出てこないのですか」という質問をされる方は少ないようです。わたしたちは質問をいただいた方に野猿広場出席表をお見せしてサル達の出席のようすを説明しています。

野猿広場出席表

ガイドコーナーでは、1983年からジライ谷野猿広場にできたニホンザルの群れの出席のようすを記録して表にしてみました。周辺にはいくつかのサルの群れがありますが、広場にやってくる群れはカムリA群とカムリC群の2つです。そこで出席表にはA群のきたときには「A」、C群のときには「C」、どちらもこなかったときには「X」が記入されます。C群のあとにA群がいれかわったりすると「C→A」と記入されることもあります。

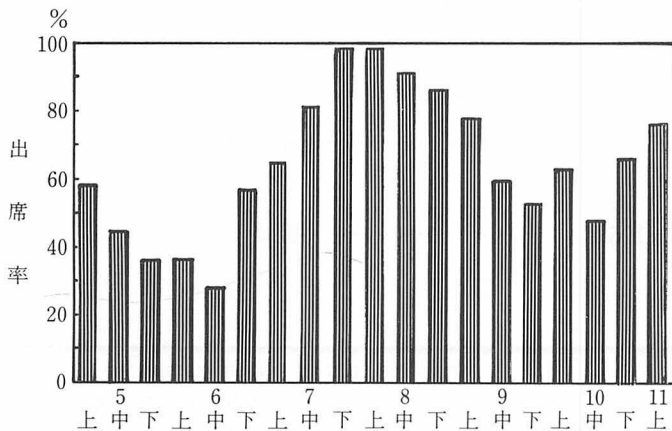
出席表をとってみるとサルが欠席ばかりしている季節と、ほとんど毎日でてくる季節があることがわかってきました。欠席の続く季節は5月下旬から6月で、7月中旬から8月いっぱい最も良く出席することがわかりました。また、9月以降は、出席の良い年や、悪い年があることがわかってきました。二つの群れが同時に広場を使うことはなく、入替わりに群れがみられることもわかりました。

山へ行くか、広場へ行くか、それが問題だ

では、サル達はこの広場にやってくるか来ないかを、どうして決めているのでしょうか。野外での餌の質や量は、季節によって違います。春の早いうちは、まだサル達の胃袋を十分に満たすほど多くの餌はありません。そのうえ、秋に蓄えた体の栄養分も長い冬のあいだにすっかりなくなり、やせほそって餌を多く必要とします。5月のはじめ、広場によくでてきますが、6月になるとほとんど出てこなくなります。この季節、山頂に向かってどんどん雪がとけ、それにともなって軟らかくて水気を多く含んだ植物がつぎつぎにはえていき、サルの餌は豊富になります。サルはこれを追いかけて山奥までいってしまうのです。7月、これらの植物も硬くなり、よい餌は少なくなってゆきます。ミズキやサクラの実や長くのびたカヤの葉の根元の軟らかい部分も食べますが、これらの食べ物よりは、餌場でのトウモロコシや大豆のほうがおいしいようで、7月末から8月のお盆ごろまではほとんど欠かさず毎日広場にやってきます。その出席率は一年で最高の90%以上になります。8月の終わりから、再び出席率は低下していきます。このころには、ブナの実やヤマブドウ、アケビなどの実がみのりだします。さらに秋が深まるとクリ、サルナシ、ツノハシバミ、クルミなどの実もなりだします。秋の平均的な出席率は、60%前後です。年によってばらつきがみられ、1984年の出席率は30%だったのに対し、1983年や1985年は実に80%前後の高率でした。これは、山の木の実の豊作、凶作がサル達に影響しているといえるでしょう。

つまりは、サル達は野猿広場でもらう餌と野外にある餌のどちらがおいしいかを較べて、山に行くか、広場へ行くかを決めているようです。

モンキー・ウォッチングは夏休みが最適



野猿広場出席率 (1983—1988)

このように、野猿広場でのニホンザルの出席率の高い季節を捜すと7、8月であるということがよくわかります。つまり、モンキーウォッチングには夏休みが最適ということになります。観察時間は午前中をおすすめします。午後になると、お腹がいっぱいになったサル達は昼寝をした後、山に帰ってしまい、2時以降広場に行ってもいないことがよくあります。ことし、A群では8頭、C群では5頭の赤ん坊が生まれました。これらの赤ん坊達も夏休みには少し大きくなって、その可愛らしい元気な姿を見せてくれることでしょう。

(白山自然保護センター)

たより

白山ろくは今、緑がいっぱいに輝いています。中宮展示館は4月29日に開館され、5月28日には5年ぶりに野猿公園まつりが開催されました。今年も、暖冬のおかげで昨年生まれた子ザルは全員無事、さらに赤ん坊はカムリA群、C群あわせて13頭が生まれました。

昭和59年度から昨年度まで行われてきた「尾添（おぞ）川水域水生動物調査」が終了し報告書が発行されました。尾添川禁漁区のイワナの数は4年で禁漁になる前の約4倍になりました。また、禁漁区は継続されることになりました。今年からは、禁漁区の範囲が一部変更され、蛇谷本流はスーパー林道料金所下の蛇谷第3号堰堤から上流全域と途中谷全域となりました。白山の自然誌9「イワナと水生昆虫」が出版されました（自然誌をご希望の方は120円切手を同封のうえ当センターまでお申し込みください）。

6月3・4日には市ノ瀬野営場と、チブリ尾根のブナ林で自然観察会が行なわれました。晴天に恵まれ、オオルリやキビタキの声に大勢の参加者は耳を澄ませました。

環境週間の行事として、6月5日には鶴来町本町の西圭子さん（石川県商工会婦人部連合会理事）に当センターの「一日所長」をしていただきました。本庁舎で「一日所長」に任命され、許認可などの書類に決裁をした後、当センターが所管している獅子吼手取、白山一里野の各県立自然公園、白山国立公園をはじめ中宮展示館、ブナオ山観察舎、市ノ瀬駐在所の各施設を熱心に視察されました。西さんは「素晴らしい白山の自然をいつまでも大切に守って行かなければいけませんね。」とおっしゃっていました。

4月1日付で当センターの所長が代わりました。澤口良雄前所長は県環境部自然保護課長に転任し、後任に南猛が着任しました。

目 次

表紙 タマヒゲマワリ	1
白山のショウジョウバエ	佐伯 芳造…2
白山登山をするアキアカネ	上田 哲行…6
白山高山帯のクモ類	高 順一郎…12
こんな発見・あんな記録	8
野猿広場出席表（1983-1988）	野崎 英吉…14

はくさん 第17巻 第1号（通巻71号）

発行日 1989年6月30日
発行者 石川県白山自然保護センター
石川県石川郡吉野谷村木滑
〒920-23 Tel 07619-5-5321
印刷所 株式会社 橋本 確文堂